

令和7年度第22回「白山市ミライ会議」会議概要

※会話の順番を入れ替えたりまとめたりしています。
※制度などの説明は、会議開催時点のものです。

日時:令和7年11月8日(土)10:00～

場所:柏野コミュニティセンター

参加者:9名



- ◆ 季節ごとの行事で交流の場を設け、さまざまな工夫をすることで参加者が増えています
- ◆ 地域コミュニティ組織自体で事業を動かしていくのは今後の課題です

(参加者)

最近の活動内容の現状などをお話します。公民館と地域コミュニティ組織の運営上の違いとして、公民館のときは企画を公民館職員が立て、運営審議会や町内会長会で検討して実行していました。一方、地域コミュニティ組織では、執行部会で行事などの企画を検討し、役員会に諮って承認を得たうえで執行しています。

ここ1年ほどの大きな行事について、行事ごとに工夫と参加状況をお話します。

1つ目は春フェスタ(4月)です。花見のシーズンに合わせて、じょんがら公園でイベントを実施し、人気のキッチンカーも呼んで地域住民の懇親につなげています。地区外からの集客も意識し、道の駅めぐみ白山からの循環バスの対応もしました。その結果、約800人の集客がありました。

2つ目の夏祭りでは、じょんがら公園でのイベントに加え、じょんがら踊りとコラボして一体感をつくり、地域住民の懇親につなげています。コラボは今年で2年目で、集客して盛り上げることを意識して取り組みました。集客は約600人でした。

3つ目、文化フェスティバルは、柏野コミュニティセンター内で地域住民の作品展示を行い、今年は敬老の集い(あいあいフェスティバル)と同時開催することで、文化フェスティバル全体の盛り上げを図っています。

また、近隣地域と連携した企画として、去年は加賀野地区の子どもたちとスタンプラリーを行い、両地域のスタンプを集めた方に景品を贈呈しました。今年は範囲を広げ、松陽小学校区の4地区(柏野地区、笠間地区、宮保地区、加賀野地区)でスタンプラリーを実施し、3つのスタンプで景品を贈呈する形で行いました。その結果、2日間で約400人の参加がありました。

4つ目は冬フェスです。クリスマスシーズンのイベントとして、地域住民の懇親を目的に実施しています。構成として、昼の部は子どもと高齢者向け、夜の部は大人向けとして、参加しやすい形に分けて実施しています。去年は、昼の部が84人、夜の部が48人の参加で、盛り上がりのある形で実施できました。

実施の仕方としては、基本的には以前の流れと同じで、職員で原案を作り、執行部で検討し、役員会上がって承認をして実行していくという流れです。

本来は、執行部で原案を作り、組織自体で動かしていくことができればいかなど考えていますが、うまくいかないところもあり、厳しい状況です。

(市長)

そこはなかなか厳しい点だと思います。ただ、各組織でも、先ほど話があったように、地域行事に参加できなかった方が徐々に増えているように感じます。フェスタなどの話がありましたが、このあたりの参加者も増えていますか。

(参加者)

毎年、皆さんが興味を持ってくださるようになり、参加者もかなり増えています。

◆ 新たな宅地がほとんどない中で、人口減少と高齢化を危惧しています

(参加者)

基本的に市街化調整区域が多いので、新しい方が入ってくる要素がほとんどありません。今年は中学校の近くで少し増設がありましたが、これ以上増える可能性はほとんどないと思います。このまま若い人が出ていく一方で高齢化が進むと、今後はなかなか厳しいと感じています。

(市長)

資料を見ると、松任市の時代の昭和45年の国勢調査と比べても、人口はほぼ同じですね。

(参加者)

昭和 45 年以降に 60 軒ほどの団地ができたことで一度は増えましたが、その後市街化調整区域に設定され、増えた人口と同程度が減って、現状となっているのだと思います。

(参加者)

人口の比率が以前とは全く異なり、高齢の方が多いです。私は昭和 46 年生まれですが、その頃は小学生が 2、30 人いて、柏野地区だけで少年野球クラブができるくらいでした。今は笠間地区と合併しても、1 チームもできないような状況です。

(参加者)

高齢化率は千代野地区、美川地区に次ぐくらいで、40 パーセント近くまでいっています。若い人は危機感を持っていると思います。

先日の文化フェスティバルでは、敬老の集い(あいあいフェスティバル)と一緒に開催しました。その分、文化フェスティバルのほうも盛り上げることができ、参加人数も増えました。効率的に実施できないかという話になり、昨年までは 6 月に行っていましたが、今年は 11 月の文化フェスティバルに組み込んで実施しました。

◆ 柏野青年会が結成され、虫送り太鼓に子どもたちに参加してもらって世代間交流を進めています

(市長)

柏野青年会は、若い方が減ってきた中で、活性化しようという動きで作られたのですか。

(参加者)

昔は農家が多く、地区の若者は JA の青年部という形で活動していましたが、現在では柏野で農家をしている若い人は 1 人だけになっていました。ほかのメンバーは農家ではない中で、地区に直接関連することならいいのですが、JA 本部の行事に参加することについて違和感があり、参加できる人が本当に減ってしまいました。そこで形を変えて、きちんと地区の団体としてやっていこうということで柏野青年会を立ち上げました。

私は柏野で生まれ育ちましたが、大人たちが力強くワッショイ、ワッショイとみこしを担ぐ姿が子ども心に残っていて、かっこいいと思ったことを覚えています。以前は子どもたちが各町内会の行事としてみこしを担ぐ機会がありましたが、現在は、柏野地区でも祭りを行っている町がほぼゼロになっています。今は大人と子どもが交わるイベントがなかなかありません。大人のかっこよさや地域の良さを子どもたちが感じられる場が少ないと感じています。

そこで今年から、以前青年部が夏に行っていた「虫送り太鼓」に子どもたちも集めて教えるようにしました。太鼓を通じて大人と子どもが交わり、大人のかっこよさや地域の良さを子どもたちに見てもらいたいと考えています。時間はかかると思いますが、「あの頃の太鼓

はすごく思い出に残っている」と感じてもらえるようにしたいです。これは市の市民提案型まちづくり支援事業補助金で実施でき、子どもたちもとても喜んでいきます。

(市長)

子どもたちがたくさん並んで、若い方も太鼓に参加していましたね。太鼓は各町内会のものでしょうか。

(参加者)

昨年度、各町内会で20年ほど眠っていた太鼓をリニューアルしました。これまではレンタルしていましたが、コロナ禍明けにレンタル費用が高額になってしまったことから、本格的にリニューアルして、もう一度太鼓をやり直そうと決めました。

太鼓のリニューアルは1基あたり80万円ほどかかる中、地域の皆さんにお願いして、支援や心づけをいただきました。加えて、宝くじの補助金も活用してスタートが切れました。

来てもらえれば楽しんでもらっていますので、住宅が建って人が増えていく中で、参加者をもっと増やしていきたいと思っています。今回は12人が参加して、全体では27～29人でした。練習はコミュニティセンターでやっています。

(市長)

若い層が減っていく中で、そうして活動して盛り上げているのは素晴らしいですね。

◆ 夏休みの学びと体験を地域コミュニティ組織で支えています

(参加者)

先ほどから子どもたちの話が出ていますが、地域コミュニティ組織でも、夏休みが始まったら宿題を見てあげようという取り組みがあります。子どもたちがコミュニティセンターに遊びに来ることへの抵抗はあまりないように見えるので、その点はとても良いと思います。子どもたちに機会を用意するのは大切だと思っています。

また、白山市では、今私は学童の立場にいますが、来年度の1年生の学童希望者が非常に多く、定員を超えてしまう状況が出ています。そうしたところを何とかやりくりできればと思います。例えば、コミュニティセンターを活用することも選択肢の一つだと思います。共働きの家庭がとても多いので、安心して働ける環境を整えるという意味でも、学童の運営を含めて検討していく必要があると思います。

(市長)

ワクワクサマースクールは、コミュニティセンターで夏休みに実施しているのでしょうか。また、チャレンジ合宿は、どんなものですか。

(参加者)

サマースクールは、子どもたちの夏休みに、いろいろな学びの場を用意してるものです。学童に関わっている方に講師として1~2日講義を担当してもらっています。ほかにも、遠足やちょっとした体験旅行などを計画していて、子どもたちの半数以上が参加しています。

チャレンジ合宿は、職員のアイデアで、このコミュニティセンターで、貸し布団を借りて実施しました。食事も、できるだけ子どもたちに作らせるようにして、指導しながら進めています。

「宿題やつつけよう」では、宿題の時間を設けています。基本的には各自で取り組みますが、分からないところがあれば大人が教えます。

子どもたちは、やはりさまざまな事業を楽しみにしていますね。

地域コミュニティ組織としては、生涯学習部会が担当し、市の交付金事業として実施しています。

(市長)

柏野地区では子どもを育てることにとっても力を入れていますね。

◆ 市街化調整区域の制約がある中で定住人口の増加が見込めないことに危機感があります

(参加者)

このままだと、子どもがいなくなる未来が見えてきます。他の地域では、例えば松本の話を聞くと工場誘致なども進めています。こちらは市街化調整区域で建てられない、基盤整備後の縛りもあって何もできない状況が続き、今は定住人口が増える見込みがありません。

そうなると買い物が課題になります。特に高齢者は、私の親も80代ですが車に乗せるのが危ないので免許返納を勧めています。ただ、では買い物をどうするかとなると、バスも簡単ではありません。だからこそ、定住人口を増やすことが大事だと思います。

ここ数年、公民館の時やコミュニティセンターになってからもいろいろな人の話を聞いてきましたが、高齢者は危機感が薄いと感じます。限界集落になること、買い物に行けなくなること、人が減ること、交番もなくなるかもしれないことが、十分に見えていませんでした。親世代の責任だとは言いませんが、危機感を持って動いてこなかった分、人口が多い地域との差が出ていると思います。

以前の公民館は、悪い意味ではありませんが「来たい人が来る」施設だったように思います。現在では地域コミュニティ組織になり、できるだけ住民全体を巻き込む流れでイベントをしています。これまでは社会体育大会くらいでしか高齢者と交流する機会がありませんでしたが、意見交換の場も少しずつ出てきました。危機意識を共有しないと、田んぼを手放したくない人の気持ちは分かりますが、その意思を変えていかない限り高齢化のスピードは止まらないと思います。

平野部で国道 8 号線にも笠間駅にも近い、これだけ条件の良い場所なのにこの状況はまずいと、私や 50 代の数人で以前から話しています。ただ田んぼの所有者は親世代が多く、なかなか進みません。現実として田んぼで生計を立てている人はいません。貸して得られる賃料も大きくなく、固定資産税分くらいという感覚です。それなら、市街化調整区域を外すことも考えないといけないと思います。

道の駅ができて少し賑わうかと思いましたが、気になる人たちも集まっています。人口が増えて住宅が多ければ、そうした動きにも地域として目が届きやすくなりますが、今はそこまでの力がありません。結局、人口を増やすことが急務だと思います。調整区域を外すのに 5 年、10 年かかるのは分かっていますが、その間に私たちの世代がいなくなり、子どももいなくなるのではないかという強い危機感があります。

うちの集落は 20 件しかなく、町内会長は 75 歳以下と決めました。そうすると、担える人は 10 人しかいません。子どもを地域で育てることは大切ですが、その子どもがいなくなったらどうなるのかを考えると、恐怖を感じます。

自然災害はこの地域では比較的少ないと思います。能登は大変でしたが、こちらは大地震は起こりにくいと聞いていますし、水害も起こりづらい。特に柏野地区は大きなリスクが少ないと感じます。だからこそ、住みやすい地域なのにこのままでいいのか、もったいないという思いがあります。

(市長)

確かに、この地区は加賀笠間駅も近く、国道もあり、バス停もありますね。

今のお話は、他の地区でも出ています。市街化調整区域の課題は、地権者のまとまりも必要になります。実際に、市街化調整区域から市街化区域への変更や、区画整理をしたいという要望は増えています。

白山市では、鶴来地区の柴木・部入道で大きな区画整理を進めていますし、松任駅北の相木地域、西松任駅ができた北安田南部、番匠町でも行っています。

町内会で動き出しているところもありますし、石立町では、民間で区画整理をして工業団地にしようという動きもあります。

農業の担い手も減っていますが、こちらの地区はどうですか。

(参加者)

柏野地区で農家というと、5 町内会で 4 軒です。

人口規模が小さい地区ですが、その声をまとめるのが、ここにいる私たちの仕事だと思います。まとまったら、市長や関係する方にきちんと届けたいです。私たちの声がまとまったときに、ぜひ聞いてもらえればと思います。

(市長)

地区でまとまった要望はいろいろ届いていますので、もちろんお聞きします。

- ◆ 事務を担うコミュニティセンター職員を評価していただきたいです
- ◆ 地域コミュニティ組織への交付金の自由度を高め、地域裁量で使えるよう改革をお願いします
- ◆ 「防災拠点としてのコミュニティセンター」を周知し、コミュニティ柏野で実働的な災害対応体制を整えていきます

(参加者)

地域コミュニティ組織になってから、世代間の交流や、企業・学校・行政とのつながりが少しずつ良くなり、全体として活発になってきたと感じています。これはとても良いことです。

一方で、事務を担っているコミュニティセンター職員の3人には、感謝の気持ちしかありません。ぜひこの方々が、地域にとって大切な存在として正當に評価されるよう、市としても後押ししてほしいです。私の知る限り、この3人がいないと、行政・企業・市民・団体・学校のつながりが本当に薄れてしまうと思います。住民として感謝を伝えるのは当然ですが、市からも評価する機会があればと思います。

組織運営は、市の後押しもあって進みました。前市長が各地区を回ったときに「組織を作れば交付金を出すので、自分たちで使ってほしい」という話があり、当初は「自由に使えるならいい」と受け止めて、作ろうという流れになりました。

ただ実際には、地域コミュニティ組織への交付金をいただいているものの、これまでの公民館の交付金(委託料)と比べて少し緩くなった程度で、依然として規制が多いのが現状だと思います。地元からも負担をいただいて運営している以上、もう少し地域の判断で、私たちの範囲の中で使えるように改革してほしいです。

(市長)

同じ話は他の地区でも出ています。地域コミュニティ組織で、ある程度自由度を持って使えるようにしたいという声も多いです。ただ公金には一定の縛りがあります。公金は公金なので。

(参加者)

私としては、組織というより「コミュニティセンターができた」という認識が出发点で、そこからコミュニティ柏野(地域コミュニティ組織)の組織ができたと理解しています。まず「防災拠点としてのコミュニティセンター」という位置づけを、地域の共通認識として浸透させることが大切だと思います。活動の中でも、行事と防災を常に結び付けてアピールできるような取り組みがありました。

町内会長会でも、防災の観点で何ができるかを話し合ってきました。防災拠点としての考えをコミュニティ活動の中心に置きつつ、ほかの活動にも役立つ形にできないかという提案があり、検討を進めています。

(参加者)

白山市からの指導もあり、実動部隊として災害対応の組織を作る話があります。書面上の組織はありますが、実際には動いていない状態です。これを来年度の1年ほどで、地区全体として具体的に整備していきたいと思っています。市の危機管理課も協力していただけると聞いていますので、力を借りながら形にしたいです。

もう一つは、高齢化・過疎化が進んでいることです。一方で下柏野地区は、笠間中学校前に振興団地ができて22件が入居し、新しく来た方も増え、若い世代が増えています。ただ高齢世代と若い世代では考え方にギャップがあり、それをどう埋めるかが課題です。下柏野だけでなく、柏野地区全体の課題だと思います。

例えば今年、本来は秋祭りでみこしを出す予定でしたが、平日開催で担ぎ手が集まらず、出せませんでした。高齢の方は「会社を休んでも出てこい」と言いがちですが、今はそういう時代ではなく、生活が優先されます。認識のずれがあるので、そこを調整していく必要があると思います。

◆ 柏野じょんがら踊りでの笠間中学校との連携を復活させ、高校や大学との関係も深めていきたいです

(参加者)

笠間中学校では、以前は運動会で「柏野じょんがら踊り」を行っていましたが、今はやっていません。率直に言うと、縁が切れてしまったそうです。校長先生が変わると、方針も変わってしまい、やらないという意向になってしまうことがあります。

何とか来年度から復活できるように、働きかけていきたいと思っています。

(市長)

やはり子どもたちは、先ほどの話にも出ましたが、大人と一緒に楽しい雰囲気味わうことが大切だと思います。そうした経験は、子どもたちの活性化につながり、成長にも良い影響があると感じています。

いくつかのお祭りを回らせてもらっていますが、いちばんうれしいのは子どもが楽しそうにしている様子を見ることです。地域の行事で子どもが楽しそうにしていると、大人のみなさんもやってよかったと感じると思います。

(参加者)

改めてになりますが、この地域はやはり絆というか、夏に戻ってくるとじょんがらを踊れる人がこれまでは結構いました。ところが、中学校での活動が途切れてからは、じょんがらに行こうと声をかけても、行きたくないわけではないけど、なんで行くの?という雰囲気の人が増えました。とても寂しいですし、地域の一体感にとって大きなマイナスだと思います。ぜひ笠間中学校の校長先生に、「あれはやらないといけない」と一言伝えていただきたいです。

(市長)

私のイメージでは、以前は校長先生が地域とのつながりをとても大切にしていました。笠間中学校でも地域の方に講師として来ていただき、いろいろな活動をしていました。じょんがらも運動会で必ず踊っていた印象が強く残っています。

(参加者)

コロナ禍よりも前にやらなくなっていたのですが、今となっては、小学校も中学校もコロナで運動会が午前中で終わるようになっていて、これもハードルとしてあるのではと思います。

(参加者)

じょんがら踊りと中学校を結びつけるのはとても良いことだと思います。ただ、じょんがら保存会は高齢化が進んでいて、継続が難しい面もあります。地域コミュニティ組織としても、じょんがらを動かしていく人をそろえないと、学校とのつながりも続きにくいと思います。

(参加者)

中学生や小学生に来てもらえると、だいたい親御さんも一緒に来ます。そうすると、私たちも話ができます。そういう接点ができれば、地区としての方向性、たとえば「調整区域を一部外しましょう」といった話もできると思います。これまでそれが一切なかったのは、地区の側の問題でもあります。地域コミュニティ組織ができ、施設も一通りそろった今だからこそ、きっかけを笠間中にするのかは分かりませんが、何かを皮切りに進めていけたらと思います。

(市長)

柏野じょんがらは、今回松任高校の学生さんが来ていましたよね。何人くらい来ていましたか。その他、金城大学などとの連携はいかがでしょう。

(参加者)

松任高校からは、高校生が8名で、教頭先生と顧問の先生を合わせて10名が参加しました。松任高校は「地域に貢献する」という方針があり、その一環として、じょんがらに参加していただけたのは本当にありがたいことです。

(参加者)

今年は金城大学と何とかコラボできないかと思い、相談したところ、夏祭りにボランティアで学生 5 名に来ていただき、とても助かりました。ただ、学生も忙しく、なかなか来られないという話も聞いています。踊りや舞台が好きな学生に来てもらえると助かります。

また、先日イオンモール白山で金城大学が主催した SDGs のイベントがあり、柏野じょんがら踊り、ほうらい祭り、鳥越一向一揆まつり、横江の虫送りの 4 つの地域の祭りの未来についての発表がありました。柏野地区出身の金城大学 2 年生がじょんがら踊りについて発表していて、じょんがらの良い点をしっかり押さえた内容でした。これをきっかけに、金城大学との関りも深めていきたいと思っています。

(参加者)

この前、じょんがら踊りでは金沢のチームも取り入れて踊りましたが、全国の民舞大会で 3 位を取りました。踊りとして面白いという評価をいただいたのだと思います。そこに歴史的な裏付けや教育的な要素も組み込み、中学生に伝えていければと思います。

(市長)

地域貢献は、市内の各地域で、いろいろな大学が行ってくださっています。また、地元の松任高校、鶴来高校、翠星高校も地元での活動を積極的に行っています。

一方で、中学校との連携は薄れてきている部分があるのだと、今日の話聞いて感じました。小学生は太鼓などで参加していますが、中学生が少し抜けている印象です。中学校の校区は地区をまたぐことが多く、笠間中学校は 5 地区ありますので調整が難しいところもあるとは思いますが、地区によっては工夫されているところもありますので、笠間中学校との連携も続いてほしいという思いがあります。

市や教育委員会としても、小中学校がさまざまな場面で地域と連携していくことを推進しており、学校・地域それぞれの課題を互いに助け合いながら解決する「コミュニティスクール」の取り組みや、地域でフィールドワークをするジオパーク学習を行っています。

中学校からは、中学生がお手伝いできることはないかと問い合わせをして、できることから進めているところのようですが、地域からのお声掛けは大変ありがたいことですので、ぜひコミュニケーションを取っていただければと思います。

また、先ほどじょんがら保存会の高齢化の話も出ましたが、世代を超えた連携や継続につなげられるよう、地域の皆さんで協力していけたらいいですね。笠間中学校にも、このようなお話があった旨伝えておきます。

(市長)

本日はさまざまなご意見をありがとうございました。いただいたご意見を参考にしながら、市としても今後の取り組みに生かしていきたいと考えています。

また、柏野地区のコミュニティについては、私もいくつかの取り組みに参加させていただく中で、地区をしっかり盛り上げていこうという皆さんの思いを感じました。今後ともどうぞよろしくお願いします。